

平成24年度 第2回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録

【日時】平成24年8月29日（水）午後7時30分～午後9時30分

【場所】市役所5階 501会議室

【出席者】

〈河内長野市文化振興計画推進委員会委員〉

谷 悟・魚返 普子・川上 勝・小西 朋子・白井 春夫・寶楽 陸寛・南 美鈴・山田 淳子・
渡辺 正直

〈事務局（河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課）〉

井上・東畑

〈オブザーバー（公益財団法人河内長野市文化振興財団）〉

大久保

【配布資料】

- ・平成24年度 第1回 河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・資料1 平成24年度第1回河内長野市文化振興計画推進委員会議事録
- ・ラブリートニュース他

以上

井上課長

こんばんは。残暑厳しい中また、出にくい時間帯にも関わらず、ご出席いただき有難うございました。

今日は、前回の委員会での検討テーマの設定ということに際し、宝楽委員に資料を作っていただき、それに基づいて議論の整理と今後の方向性というところで検討していただき概ね人の発掘をどうするのか、或いは駆け込み寺的なものをどう考えていくのか、評価をどうしていくのかというところを議論いただきました。本日も引き続きこの委員会での検討テーマの設定のいうところを進めていただければと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

谷委員長

今回は、今までの議論を整理し、地域資源を発掘する調査、特に芸術文化に関わる人に焦点を合わせて進めていくこと、もう1つは文化の駆け込み寺的な機能の必要性について、皆さんの意見をまとめた。芸術文化というものを支えていく、育てていくには、この2つをしっかりと作っていかないといけないということで、あらためてこの部分をテーマにしていきたいと思う。特に人の発掘という部分に関しては、最終的にはデータベースを作りたい。生涯学習の分野では既に存在するということが、芸術文化の領域では、それがまだ、できていない。ただ、データベースという情報が羅列されていて、必要な人がその時だけ情報を手に入れるという冷たいイメージがないわけではないが、具体的にどうすれば面白くなるかということを考えていきたい。

その情報を活かして、フリーペーパー〇〇編という形で数種類に分けて作成したり、本やホームページに発展させたり、展覧会やトークセッション、ワークショップ等も展開できるのではないかと思う。どんどん、人の輪が出来てくると、実際、データベース化をどういう形で進めていくのかということの検討も必要になる。実際の作業を進めていくのは市民による調査隊を組成するなり、公募というシステムで情報を収集することになると思う。本委員会としては、どのような基準と手法で情報を集め、如何にまとめ上げるのか、具体的に動けるように、その指針を示す必要がある。

また、これらのことは、本委員会が芸術文化という概念をどう捉えるかという事に関わってくると思う。まず、調査を進める際、どういう部門が存在するかを考える必要がある。大きく分けて2つの部門が考えられる。例えば、ハイアートというキーワード、これは、プロフェッショナルな次元で活躍される方々の存在である。一方、市民文化、これは第4次総合計画でも市民文化というものを大切にしていきたいと謳っているので、本委員会としても、市民文化というものにも積極的に取り組んでいきたいと考える。市民文化を育てて推進していくキーマンといえる人とか、豊富な文化財を有するまちに相応しい伝統文化を守る人、更には、未来のアートの扉を開く潜在的なパワーを持つ子供たちの存在も含め、面白い活動をしている人達を網羅していく。それは、先程のハイアートとして、プロフェ

ッショナリティーを持っている人達と対極にあるように見えるが、そうではない。そこに繋がっていく市民文化の力を把握したいと思う。伝統文化、また、福祉の領域では、例えば共同製作所で仕事をしている人達や老人ホームに暮らしている高齢者の方々が作るもので、ユニークな発想力を放っているものに注目したい。このようなことを考える際、どうしても、ハイアートにこだわってしまうが、河内長野では、地域資源を積極的に使った職人の仕事の中からもすばらしいものを見つけ出したい。本委員会では、河内長野基準を設定し、どこまでを調査範囲として捉えるのか、また、どのような調査手法で実施していくのか、核の部分を検討することが必要である。調査については、市民が取材したり、公募により情報を集約するという方法があると思う。河内長野らしさをできる限り、抽出できるあり方でのぞみたいと考える。まずは、まちの体温が感じられるような芸術文化を育む人を探して出会いたい。これを指針として、提言に盛り込みたいと思う。これは、決してお金を用意しなくても人海戦術で出来そうな気がする。どうやったら調査ができるのかという点について、ご意見をいただけたらと思いますが、どうでしょうか。

白井委員

まず、文化とは何かということ、文化の捉え方はそれぞれ皆さんで違うと思う。私自身は文化とはかなり幅広く捉えている。一番広く捉えると生活そのものが文化になる。人の発掘となると生活の基盤、やはり自治会の組織がベースとなると思う。他には、色々なサークル、団体がある。例えば文化連盟など。ただ文化連盟に入っている人達は限られている。それに入っていないところに面白いものがあると思う。それに含まれない人をどう発掘するかだと思う。

谷委員長

限られた範囲ではなく、そういうところに引っ掛かってこない人たちにも会いたい。文化連盟というきちんとした組織で活躍されている方もよいが、もっと私たちが驚かせ、揺さぶるような人たちはいると思う。

谷委員長

自治会に調査の協力を依頼し、各地区の基礎情報を集めることは考えられないか。

白井委員

自治会での調査は難しいと思う。私は役員をしているが、そういう話を回覧で回してもなかなか自分から進んで申し出る人は少ない。人を発掘するということはものすごく難しいと思う。

谷委員長

前回も申し上げたように、今回のテーマは、行政がやりにくいとか、やりたいが、どうしてよいのか、わからない分野に手をつけていこうというものである。人を発掘することは確かに難しいと思うが、それに挑みたい。創作している人達は作品を鑑賞されたい気持ちと恥ずかしい心理が拮抗する場合があります、自分では名乗りを上げることにためらいをおぼえることもあるだろう。

白井委員

それと、一部の人だけでいい、別に広げる必要はないから親しい人達だけでやっていることでよしとする考え方もあろう。私の知っている人達はそんな人が多い。

山田委員

具体的にはどのようなことをされる方の事ですか。

白井委員

ペーパーラフトに近いのですが、灰皿であるとか実用品とか色々な物を作っている。月に1点か2点しか作っていないが、すごいですよ。知り合いの親しい人にしかあげない。

山田委員

親子劇場でも、竹の音楽会をする時に竹細工をする人を探したことがあり、趣味だがかなりレベルの高い、広報か何かで紹介された方をお願いしに行ったが「もう止めた」と言われた。竹加工小屋まで作っていたが、その人は教えに行ったりするのは嫌だと言っていた。昔、大文連と言って大阪文化連盟が年刊でジャンル毎に各市町村の加盟団体のリストがあったが、何年か前に廃刊になった。やはり掲載にお金が掛かるから全部は載ってない。ラブリーホールも途中で掲載を止めた。以前、ラブリーホールが作ったリストは、本当に個人のデータの細かいものだった。もし、あのリストが残ってないなら家で探そうと思う。

谷委員長

個人のリストが既にあつたのですか。だいたい何年前のリストでしょか？

山田委員

この委員会の最初の頃のものと思う。

白井委員

先程の竹細工の方も含め、個人、団体で活躍、活動されている方のリストがあつたということ。それは、ラブリーホールに出演した人のリストでは？

山田委員

芸術家の把握のためのリストであったと思う。一方、生涯学習のデータの中でも文化芸術分野の人のデータもあると思う。それはピックアップしないとわからないと思う。

谷委員長

ラブリーホールに、当時の事務局としてデータがあるかどうか探して欲しい。

宝楽委員

前回の皆さんの意見の中で書き出していたものとして次の項目がある。文化の人をどう扱うか。数字では測れないだろうという声が前は大きかったと思うが、その中でも精神的なレベルで個人をどう発掘していくかという視点があった。私は個人を発掘するのは個人だと思っている。また、行政が結局、縦割りで、現場に出てこないのも何も発掘できていない。一方で現場に出ていくとか、分野に縛られない視点の必要性についての意見があった。さらに、調査手法に関わってくると思うが、文化の駆け込み寺というキーワードがあったと思う。他に、紙媒体で記録に残しつつ発信し続けるという声もあった。

谷委員長

調査したことを単にデータベース化すると冷たく感じるが、調査した時にその都度お金を掛けなくてもフリーペーパー化して徐々に輪を大きくしていくということが重要である。それが蓄積された時には費用をかけて本にしたり、ラブリーホールのギャラリーを借りたり、地図を作ってその人に出会えるような仕掛けをつくることを考えたい。調査で得た内容は、決して形式的なものにとどめず、まちの体温を感じられるようなものにしたい。

宝楽委員

千葉県の NPO 支援について報告したい。そこでは、子供たちにもまちづくりの事を知ってもらうため、学校の先生が NPO と市民活動支援団体を紹介して欲しいという声がありリストを作った。その時に、そのリストを作る方法として NPO がこんな事できますよとか、こんな協働できますよとか、自分たちから発信する冊子を作った。同時に、学校の先生には NPO に頼むときにはルールも作り、マッチングしていく。その後お見合い会のようになっている。今までのリスト作成は、対象分野をどうするかから入っていくが、先ず、団体の方からこんなことができますよと言ってもらい、扱い方は市民次第、学校次第という視点になっている。例えば、今まで高齢者の事しかやっていなかった NPO が子供と引っ付くことにより多面性がでてくる。アートは多様性だと思うが、ごちゃっとした中に色々な方向性があると思う。そういう意味で育てていくリスト、発想リストである。作ることに追われるのではなく、このような指針を出すのも面白いと思う。

魚返委員

調査というのはどんな方法があるのですか？

谷委員長

それを審議していきたいと思う。

まずは、各小学校区が1つの単位になるのではないかと思う。古くは銭湯とか床屋さんとか非公式なコミュニティーセンターのような役割を果たすところがあった。また、公的なレベルでは、公民館があると思うが、人が集う場には情報も集まりやすいということ意識したい。子供たちをはじめ、親、地域の人たちがもつ多様なデータをつかみたい。自治会とも連動して、展開したいが、調査を円滑に実施できるフォーマットをこちらでつくりたくないといけないと思う。ただ、「誰かいませんか？」と声をかけるのではなく、潜在的な層も含めてアピールしたくなるようなフォーマットを作ることが大切であろう。対象者の年齢も様々だと思うので、手書きで記入したり、写真を貼りこんだりできるようにしていかないといけない。話題になっているような人はピンポイントで攻めていけばよいと思うが、ローラー作戦では、各小学校区単位で、公民館や自治会の活動等で面白いことをしているが、今まで光が当たっていない人とか、個別に、老人ホーム、福祉施設、用語としては好まないが、アウトサイダーアートと言って、純粋な心を持った障がい者の人達が制作する魅力的な作品にも眼差しを注ぎたい。1人でも多く、才能を持っている方達に出会えるように、丁寧に調査をしたい。また、ラブラーホールはこれまで、館を使用された美術家、音楽家、パフォーマー等の情報を把握されていると思うので、協力を呼びかけたいと思う。問題はどのような基準で取り上げるのか、を決めることであると考えている。

川上委員

以前、美人数珠繋ぎというテレビ番組があったが、文化数珠繋ぎというのが出来ないかと考えている。それぞれの委員の方達の周りにおける文化活動をされている方から始めていく。Aという人に私が会って、あなたはこんなことをやっていますよね。私はこんな能力があるからお互い文化というものを一つの手法としてこんなことやりましょう。それはこのコミュニケーションで話を伺えると思う。そして、その人が次に誰かを紹介する。

谷委員長

友達の輪みたいなものですね。

川上委員

文化数珠繋ぎにより繋がって行くことによって、人材の発掘という事ももちろんあるが、文化を横断し繋いでいける効果もあるのではないかという気がしている。その広がりには必

ずどこかで繋がっている。それを目指してやっていけば、探すのも結構楽しいものだと思う。

谷委員長

大変でしょうが、楽しいような気がする。

魚返委員

今の話でもものすごく思い当たるものがある。和歌山が台風で大変な被害にあった時に坂本冬実さんの「おかえりがおまもり」という歌の作詞が河内長野の人で加賀田中学校を出て、東京芸大を卒業し今活躍している川村結花という人によるものであった。「夜空のムコウ」等の作詞もされている、まだ40代らしいです。それと、ファンキーモンキーベイビーズとって高校野球の行進曲になった人に詞も提供している。市長が富田林高校の後輩だとも言っていた。

委員がこういう人という目標を挙げてもらって、そこから広げていくと糸口がはっきりするかなと思う。

谷委員長

実際にそれをやっていく際には、実行委員会を立ち上げるということになると思う。システム化してオープンにしていくことが必要だと思う。また、一度、調査フォーマットのサンプルを幹事会で作ってみたいと思う。

魚返委員

そうしたらこの委員会のカラーが出てくると思う。

谷委員長

これだけでも、提言書になると思う。今までの議論で「行動する委員会」「寄り添う委員会」もう一つは「河内長野基準」等のキャッチフレーズも出てきた。抽象化とか理念化で終わってしまう提言書ではなく、具体的なイメージをつかんでもらうために、フォーマット、記入例も含めて添付したい。また、効果予測が明確となるよう、文章だけではなく、ダイアグラムも用い、本当に行動できる、すぐに動きたくなるような提言書を作成したいと思う。

南委員

そういう事に関心のあるボランティアを募集するのはどうか？

谷委員長

最終的にはそうですね。

南委員

関心のあることは耳に入りやすいので、その方達にこういう事を目的にして様々な方面に出かけるなり電話するなり調査を依頼することはできるように思う。

谷委員長

それは出来ると思います。まず、本委員会で提言をするが、その前に、一度調査に関するフォーマットを作成し、数珠繋ぎ方式で一回やってみる。そこで問題が出てきたら基準を審議する。その上で、本委員会として市への提言書を作る。それを踏まえて事務局と協議し、広報等で呼びかける。提言に基づいて実行委員会を作り、市民による市民のためのリサーチというスタイルで始動させたいと考える。

宝楽委員

新しい公共と言って、新しい公共領域をやっていく上で民の力が市の施策でも重視されている。その際に全世界的な基準で ISO26000 という基準ができた。株式会社とか法人とか NPO とか全ての社会に責任を持っている組織が、第三者によって自らの評価できる評価基準を持つことになった。2年前から全国的に NPO と行政が協働して取り組んでいく時に、基準として取り入れなければならないという方針が出ている。マルチステークホルダー・エンゲージメントという方法であるが、日本的に言うと円卓会議、ラウンドテーブルとは意味が違うが、委員会のようなメンバーで市民や様々なことに興味ある人が集まってきてテーマを決め皆が意見を出し合っって一つの報告書を作っていく。課題を知っている人で、課題を出し合っって、その後それについての対策を出し合っっていく。ISO26000 により進めていくのが、審議会の提言書の作成に参考になると思う。

また、今までの調査だったら委託を受ける方と行政の一方通行で、コンサルに依頼しパッケージで出来上がってくる。その方法は一概に否定はできない部分もある。それを市民も担うし、さっき言ったボランティアを募ってやっていく方法もある。今、フェイスブックとかツイッターとか流行っているが、流行っているのは皆好き放題言えて、一つの情報に色んな意見が付くからと思われる。それが口コミで広がっていく。リストであれば一つの情報だけだが、それがこんな情報もあるし、あんな情報もあると引っ付くような提言書をつくるのも面白いと思う。

山田委員

調査の対象者は市民限定ですか？

川上委員

市外でも構わないと思う。せめて南大阪一帯を含めるなど検討しては？

谷委員長

それは、皆さんで議論する必要があると思う。市の予算を付ける場合、対象者は、河内長野市の市民、或いは、河内長野市に活動の中心を置いている、もしくは、通勤、通学している者が基本になるのではないか。

川上委員

河内長野市に住んでいて世界的、全国的に活動・活躍している人はいると思うが、私たちの日常、耳とか目に触れないということは、活動されているのが市外ということになる。仮に、文化数珠繋ぎで繋いでいき、その人が活躍する様子を市内で観ることにより河内長野の文化のレベルを上げることに寄与することになる。また、市外で活躍している人を市内に住まわせて活動させるくらいの広がりをししないと、河内長野市に住んでいるだけ、学校に通っているだけ、仕事しているだけでは広がらないと思う。そうやっていくと数珠繋ぎの世界が繋がっていく。このように考えないと、どこがやっても同じようなことにしかない。それを考えると市内、市外関わらず、文化活動している人がアメリカにしようが、東京にしようが、全て繋いでいくという形でやった方がいいと思う。

谷委員長

編集の視点が異なるかもしれないが、河内長野市に住んでいる人が基準になると思う。河内長野市に住んでいるのであれば河内長野市でも活動する機会をつくって欲しいという口説き方ができる。その人は、現状では市に寄与していないが、市民にその存在を是非、知ってもらいたい気持ちがある。河内長野市に生まれ、かつて住んでいた、或いは通っていた人も含めて、いわゆる「ゆかり」というキーワードで捉えてもよいとも考える。ただ、単に友達を紹介するとなると、それはどこで調査しても同じ結果になってしまう。それは少し厳しいと思う。しかし、どこかでそのような人たちと繋がる方法も考えたい。

魚返委員

さっき言われたが小学校とか中学校に働きかけるというのを検討したい。ようこそ先輩じゃないけど、たとえ他で活躍していても、あんな立派な人が先輩にいるということも、一つの伝承になる。

谷委員長

このまちに誇りが持てるようになる。かつて河内長野にいた人がプロデュース機能を持つ

て呼び戻す。本市でもう一回やってもらう。そのような人たちに記念事業を催していただき、子供達に還元できればと思う。

魚返委員

あんな先輩がいたとか。おじいちゃん、おばあちゃんたちのサークルの力とか。子供たちが夢を持てるような社会を、子供たちが夢を持てるような方を紹介したい。

渡邊委員

基本的な調査をする時に、ハイアートな部分については、今のインターネットの社会で言えば河内長野をキーワードに検索するとかなりのものがデータとして出てくるが、どのくらいの人がコンピューターに精通しているかという、この前の人口調査でもわかるように、行政も最近ではホームページを見てくださいというのが圧倒的に多いが、実際に使う側がどれくらいのパーセンテージでこなせるかという私はかなり低いと思う。一方で、PCとかスマートフォンのデータであればかなり手元で検索が可能なので、一つのアプリケーションソフトを河内長野市版として作ってそれに対する予算をつければひとまず、あるレベルのものについては、接することができると思う。つまり、メジャーなものは我々が調査するよりしっかりしたデータベースがあるので比較的簡単に市民が検索できるから、それを一つのステップとして取組みはじめて、あまりメジャーでない地域限定盤のようなものは調査によってピックアップして付けていくというのが具体的なデータベースの作成手法であると思う。

谷委員長

ネットで検索するということは当然必要と思う。

川上委員

先ほどから委員長がおっしゃっているように河内長野モデルであれブランドであれ、言葉先行でも構わないので、シャープの亀山モデルではないが、世界の亀山と言い切ったように世界の河内長野モデルを文化の世界で勝手に語るかたちで、我々河内長野の人間が認定するものも別に構わないと思う。このように広げていくスタートが、本委員会の皆さん方メンバーだと思う。

私は、努めてそうしようと思っているが、色んな新しい人と会う時に自分のプロフィールを必ず持って行く。それは、短い時間で信頼関係を生む時に、私はここでこのような事をしていて、それが世間的に評価を受けてようが受けていまいが、自己満足であろうが自分のプロフィールを持って行って渡して、あなたのプロフィールくださいということでコミュニケーションを交わして信頼関係を作る。

日本人の悪い習慣として自分の事の宣伝をあまりしないことがある。それは、其々の世界

のトップにいる人でも、自分はこんなすごいことやっていますとは絶対に言わない。でも、それをやっていかないと子供達にも伝わらないし、第三者には絶対に伝わらない。その人が取り組んだ作品というのは何であれ、大きいものであれ、小さいものであれ、限られた人間にしか接しないわけだから。日々、日常に接している人まで含めて私はこんな事をやっていますよとメッセージを伝えていく責任があると思う。その為には、お互いのプロフィールを持って交流しながら輪を広げていく。それを私はやっていきたいと思っているし、努めてやっているが、そういう事を広げていくことによって世界の河内長野ブランドを世間がどう言おうが、私たちが認めていけばいいので、それが出来れば楽しいなと思う。

谷委員長

河内長野市は文化財の登録数も抜きん出ているが、その魅力に引き寄せられた芸術家、文筆家等にも注目しなくてはならないだろう。また、歴史上の人物もリサーチすれば、結構面白いものになる気がする。現存する人たちだけをデータベースの対象にするのではなく、まちの記憶も含めて展開させれば、ゆかりの意味は更に拡張できるだろう。

山田委員

谷村新司が、河内長野市に、生まれてから4歳まで住んでいた。皆さんが河内長野を彼の故郷とっていてステージで「おかえり」って言うらしい。そして、「帰ってきたよ、ただいま」「おかえり」って言うらしい。河内長野に縁のある人はあの人くらいか？

宝楽委員

NPOの世界の話だが、温泉で有名な大分県の別府温泉では、80年代以降、観光客が落ちたので、温泉宿の店主が協力して温泉博覧会、略して「オンパク」というものを作って、皆で街歩きしたり、町の中で卓球が出来るようにしたり、地域資源をどう掘り起こすかという事でいつの間にかジャパン温博という仕組みを作った。今、ジャパン温博で検索すると日本全国で温博的にやっている人達で地域を飛び越えて連携してジャパン温博学会というのも出来た。そういう位置づけの方法や、さっきの亀山モデルではないが、河内長野的に発掘の仕組みを作っていく。その取り組みは経済産業省のビジネスモデルを作るしくみの補助金を使っているからホームページとかの著作権を含めて一回作ったものは行政の持ち物としてどんどん発展していく。通常の行政との契約では二択関係しか有り得ないので成果物は全て行政の持ち物になる。ビジネスモデルを作っていくと提言の中で河内長野の資源になる。全国展開していけばそこで開発したデータベースのお金を回収することができる。そういう方法もあると思う。

谷委員長

だんだん話が大きくなってきたと思う。

宝楽委員

そういう余地を残しておかないと、河内長野も人口が減っている。

谷委員長

市だけにお願いするのではなくて、この事業に取り組む際には、助成財団に助成金を申請することも検討したい。

谷委員長

経済産業省関連のものであれば、申請できるかもしれないので所轄の課であるふるさと文化課以外に産業活性化室等と連携できる方法があるかもしれない。

川上委員

サントリーの地域文化賞みたいなものを例えば河内長野で立ち上げることはどうか？金額の問題ではないと思う。河内長野ブランドを意識すればそれを立ち上げて、市内の団体はもちろんのこと、市外でも対象にするということも検討できる。

谷委員長

文化・芸術による福武地域振興財団をはじめ、色々とあり、助成金の金額は、30万～100万円程度である。自己資金がないと申請できないので、基盤となる財源は市に理解を求め、予算化するかたちが望ましい。

宝楽委員

市民だけが対象となると難しいので、「河内長野の文化好き集まれ」とか、そういう場をつくる。例えば、南の劇場リストを作るワークショップみたいなものがあったりして、その日中に皆で出し合って地図にぺたぺたと貼って行って、そのまま、その時に手書きして、後々印刷して地域に配るとか。アナログだがそれをデータベース化するとか。調査という若い人が首を突っ込みやすく、距離感を感じることにないようにしたい。

山田委員

お店のリストを作成することは難しくない。今、言っているのは見えてない部分が多いものである。

魚返委員

高向の公民館では、カラオケを聞きながら文化を語っている。高向で地元の人でない旭ヶ丘とか少し離れた新興住宅地の人も含めて成り立っている。地元の人に「昼から編み物な

んかしていいね」と言われながら名物館長がずっと続けていて、地域だけの展示を一回しますと言われて、すごいのが出てきた。こんな田舎の人が超一流のビーズの刺繍だとか T シャツで上手にショルダーバック作ったり古布でお人形をつくったりそういう物がいっぱい出てくる。先ほど日本の特徴と指摘されたが、自分からは言わないけれど、何かのきっかけで出てくる。そのようなことをすれば、すごく活性化すると思う。もう今は飾る場所が無いくらい出ている。そうしたら地域の人たちも公民館に来るようになってきたらいい。

川上委員

作っている人がより多くの人に見せる責任があるという感じ方をさせていただくようにしていかないといけないと思う。それは、自分の作品ではなくて形となった時点からそれは第三者に対して影響を及ぼすものだという事を自覚していただき、そういう事をやっていかないと文化というのは広がっていかない。良い物は誰が見ても良い物であり、良い色は誰が見ても良い色であるので、そういう風に見てもらいたい。私がもし作ったらそう思うが、やっぱりそう思われていない。

その人がそう思わないのであれば、近くにいる人がそれをプロデュースして公開すべきと思う。そういうことも含めてやっていかないといけない。

谷委員長

川上委員がおっしゃったように作り手だけを発掘するのではなく、目利にたけた繋ぎ手の人達にも集まってもらいたい。本委員会にも、そのような方がいて、また表現者の方もおられる。多様な視点で河内長野基準及びシステムを作り上げていきたいと考える。

宝楽委員

以前の話では情報発信が主であるが、出てきた情報をどう生かすのかも重要である。

川上委員

このような事している、このような事ができるという人のリストはある。それが全く生かせてない。

白井委員

河内長野市内で各小学校校区の行政主導型でまちづくり交流会という組織がある。まちづくり交流会から出発して協議会に徐々に変わってきている。その目的は、最初は好きなことを喋ろう、要するに地域の活性化が目的で様々な情報を持ち寄ろうという話で有志から出発している。そこへ自治会が入り、学校が入り様々なところが入ってきている。ただ、文化はない。其々の小学校区に入って行って、そこで何らかの形で文化の発掘の話をする。そういう文化をテーマにするという方法もある。何か事業する時には市の市民協働室から

補助金も出る。

宝楽委員

地域に入っていくというので、先日富山に行ってきた。

これは「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」と言って富山のワールドミュージックの音楽祭の取り組み。その会館は1時間に1本しか電車が無いようなところ。ところが、ワールドミュージックでは結構人が集まっている。富山の人でもワールドミュージックはしていなかったが、例えばティンパニーとか南米の太鼓とか、それを流行らせる為に各中学校に自分達で楽器を持って行って、その太鼓教室を作ってもらって当日パレードをするから出てみないかと、敢えて文化の話が出るように仕掛けたらしい。地域にプロデューサーがいて文化の話をどう調整するかをきっかけに取り組みが始まった。

ただ、既存の地域の人達にアートを語ってもらうのはすごく難しいと思う。河内長野世界民族音楽祭で、だんじりを世界のアーティストと絡めたいと思っているが難しい。地域側にアートを語る人を育てていくことが必要だと思う。富山は様々な世界の民族楽器が出来る小中学生が沢山いる。音楽祭の日に駅に降りて誰も居ないけど、その一か所だけ子供が集まっている。地域の民謡を民族音楽に仕立て上げるという試みをしている。

川上委員

河内長野も音楽を完全に愛されているプロデューサーを育てて行く必要がある。失礼な言い方だけど、言っても素人なので、世界のミュージシャンに対して河内長野でやることに意義が有るとかコラボやろうよと言っても、乗ってこないのはそういうことと思う。

プロデュースした音楽作品と運命を共にする形まで行かないといけないと思う。そこで、評価がゼロであろうが、100であろうがそれに懸けるというアーティストと運命を共にするからプロデューサーは信頼を受ける。どこまで突っ込めるかという問題です。でない、聞く人がなるほどと思うコンサートなんてできないですよ。ましてやお金を払って来るわけですから。私は基本的に無料のコンサートでイベントやっているが、そこで良かったと簡単に言ってくれるけど、お金を取るとまた話は別だと思う。

谷委員長

アーティストはすごく繊細である。

川上委員

微妙に感じられる。

谷委員長

アーティストにしっかりと寄り添い、心中する覚悟でやらなかったら、手を抜かれたり、

どこかに行ってしまう。だから、渡辺さん、南さんのお二人がラブリーホールで活動を続けられているのはすごいことだと思う。プロデューサーを育てるということは終局的な目標で、アーティストのリサーチをしながら、そのような活動にも興味をもつ人たちも見つけ出すことが大切だ。両方の要素が整備されて、はじめて、文化は育まれるものと思われる。

川上委員

奈良県の吉野町が去年から吉野町を宣伝する30秒のCFを募集している事例がある。ただし、外に向いての宣伝ではなく町民が納得する吉野町の宣伝で賞金は一切ない。グランプリには生駒ケーブルテレビと吉野町ケーブルテレビへの露出の権利のみだが、11本の作品が集まった。それを応用しようと思ったら、河内長野を宣伝するもの全てを募集しようということになる。絵や詩、音楽、写真等あらゆるジャンルで11万の河内長野市民が納得するCFを作ってくださいと仮に投げたとしたら、応募者がゼロとは思わない。それは賞金も出さなくていいと思う。市役所のモニターで流しますくらいでいいと思う。そういう事がきっかけでできないかなと思う。この前その話を聞いて何か結びつけられないかと思った。面白いと思ったのは町民が納得するプログラムだということ。外を向くのはまだ先の話で、町民が自分の町はこうなんやと気づく気づかれるコマーシャルを作れというのがテーマになっている。

このようなことの河内長野版みたいなことが出来ないかなと思う。

山田委員

河内長野市で何年か前に買物難民について調査をされたと思う。そういう発想で言ったら文化難民調査をすればどうか。大矢船南町で、昔お店をしていたところに行ったが、そこは何処に行くのも遠いから近所限定の文化交流をずっとやっていた。人を呼んで、色々なレベルの人が入り混じっていたらしいが、それでも結構良かったという人がいた。そこではラブリーホールへ出てこられる人ばかりではなくて、自分たちの地域において自分たちで企画している。その辺の調査もできたらと思う。

白井委員

私も大矢船南町の個人の家に行ったことがある。

川上委員

あそこは綺麗な環境のいい所で別世界。何年か前に初めて行ったが、こんな所が河内長野にあったのかと思った。

谷委員長

家でアートの企画をしているのですか？

白井委員

地域のコミュニケーションの輪を変えて、ジャンルはバラバラ、色んなゲストを呼んでいく。私も喋ってくれと言われた。

山田委員

エリア限定の人しか聞きに行けないらしい。

魚返委員

先日体調を崩して入院していたとき、目線に稜線が非常に綺麗だった。その目線から見るとお地蔵さんが上を向いて寝ているような場所がある。稜線コンクールみたいな事はどうか？皆に呼びかけると、いい発見があるのではないか？

谷委員長

地域資源を生かしたコンクールは面白いと思う。

谷委員長

時間が来ましたので今日はここで終わりたいと思います。今日の話し合いだけでも、骨格はできたのではないかと思います。これをもとに、幹事会で整理し、あまり、お金をかけずにすぐ取り組みたくなるような提言書をつくりたい。

川上委員

一度、皆が知っている世界の人を紙に書き出していくのはどうか？繋いでいくことになると思う。それは皆さんの心の中にはあるが、字にしたりすることにより、どこまで出てくるか？

谷委員長

今回の内容を決して、理論だけにとどめず、次は具体的に事例をあげるかたちで進めてみたい。抽象的なものを指針として投げたところで、実行出来ないと意味がないので、一度このメンバーで取り組んでみることは大切であると思う。